

2019年(平成31年)

3月28日

木曜日

夕刊

神戸新聞

神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7

<https://www.kobe-np.co.jp>

購読のお申し込み 0120・

算数はそれほど得意ではなかったが、そのつまずきがひどくなり中学の3年間は数学がさっぱりわからず苦しい思いをした。思い返すと、目隠しをして、森の中を高速で走るような言いようのない不快な体験だった。高校では挽回したが、かといって、数学を理解したとも思えず、折に触れ、あの体験はなんだったのだろうかと考え続けていた。

わからないときは、根源に戻るに限る。大人になってから、数学の歴史と哲学の本を読み始めた。数学の歴史は、数学が誰かによって作られたものだと思える。微分法やコサインを覚えても、何の役に立たないようにも思われる。だがそれは、もともとは、誰かが何かの役に立てるために作ったものなのだ(微分法はニュートンとライプニッツが約350年前に作った)。数学はすべて人によって作られた。そのことは、無味乾燥な数字と数式の羅列に息吹を与えてくれた。

随想

数学に悩む中学生への手紙

寺田 匡宏

数学の哲学は驚きだった。なんと、数が実在するかどうかすら、まだよくわかっていないのだという。1や2や3は、算数や数学の基礎なのに、その「数」が存在するのか、それとも数学者のファンタジーなのか、未解決なのだそう。石が4個ある。でも、モノとして見れば、そこにあるのは石だけで、4という数字なんてどこにもない。

小学1年生のとき、たしか、リಂಗゴ3個とミカン4個を足したら、果物は何個あるでしょう、という問題が教科書に載っていた。だがこれは、数の実在に関わる根源的な問題を含む。これに7と答えることは、ものすごい知的跳躍でもあるのだ。

数学に悩む中学生のあなたへ。小さな声で、先生に、そつと「数ってあるんですか?」とたずねてみてはどうでしょう。そうしたら、数学との新しいつきあい方がひらけてくるかもしれませんよ。

(てらだ・まさひろ 総合地球環境学研究所客員准教授)